

東京家政学院大学紀要 第四三号 二〇〇三年 人文・社会科学系 抜刷
(二〇〇三年八月発行)

『狭衣物語』における「心ひとつ」の位相

井
上
眞
弓

『狭衣物語』における「心ひとつ」の位相

井 上 眞 弓

目次

- 一 狭衣の「心ひとつ」
 - 二 女二宮の「心ひとつ」の位相
 - 三 『源氏物語』の「心ひとつ」表現との径庭
 - 四 『伊勢物語』の「心ひとつ」
- 結 明かすことよって生じる孤絶の様相

『狭衣物語』には、男主人公狭衣に寄り添う語り手によって、狭衣の心の中は禁域となっている¹⁾。こうした物語の有り様と狭衣の孤絶や女君の孤絶²⁾はいかなる関係を結んでいるのだろうか。孤絶を象徴するものとして「心ひとつ」という言葉に注目し、『源氏物語』を通過したところに存する『狭衣物語』の孤絶の有り様を炙り出してみたい。

一 狭衣の「心ひとつ」

狭衣に対して用いられた「心ひとつ」の語は、五例ある。

①月も立ちぬれば、暑さのわりなきころは、水恋鳥にも劣らず心ひとつに思ひ焦がれたまふを知る人なし。

参考 大系 卷一 五四頁

②かくのみ、明け暮れひとつに見奉りたまふままに、心のみ尽くしつつ言ひ知らぬ言の葉、気色をひとつころの御目、耳のみ知らせきこえたまへど、人には夢にも思ひ寄るなし。あながちなる様にて近う見奉らんと思さば、端山のしげりだに難かるべきならねば、何の障りはあらんとする。されど親たちの思さんこととうたであるを思しつつ、心のままにも乱れたまはぬままに、さすがに³⁾はあるまじきことと心ながらことわられ、心ひとつに忍び過ぐしたまふ。

参考 卷二 一七六―一七七頁

③⁴⁾年ごろは、心づから、もの思ひこそやすからざりけれ。まことしう人を「うらめし、かなし」とまでは思し知らるることやはありつる。今宵はあはれなりつる御けはひなどの、面影に心苦しう恋しきは、ひとかたにもあらず。つらう情けなきものに思ひ果てら

れ奉りてやみぬるを。今はとりかへすべき方もなきかはりには、捨て難き身を背き捨てんとだに、我心ひとつに思ひ慰めん。かの心には「あはれ」と思し出づべきにはあらねど、いとかくあらまほしからぬ有り様を見つづ、この心をいたづらになしつるは、私は「あはれ」と思しなん。「この人に憂し、つらし」と思ひ入りたまひけん人の御悪業の、離れたまひぬべきしるべとなりなんかしとひとへにぞ思ひたちたまひぬるにも…

参考 卷三 三二六頁

④ 八かの峰の若松とかや、祝ひおきたまひけん生い先の、まことにかなひたまふやうあらば、いかなる心地しなん。さることのあればしも、まことに生ける甲斐ありける身とは、おぼえなんかしかのつれなき御心にも、さりともいかでか、いとむげには思されんなど、心ひとつに思すにつけても

参考 卷四 四三二頁

⑤ 一の宮の御折、よそのことにうち聞きて過ぐしに、中納言の典侍のほめかし出でたりしより、あさましうかなしうつし心もなうなりそめて、かの鶴の一声聞きつたりし雪の夜のこともまづ思し出でらるるに、八かばかりもわがものと見奉るはあるべきことかは。我、年ごろ思ひ譲る方もなく、心ひとつにあはれにかたじけなく心苦しき方にも、また飽かず口惜しき人の御ことの、年月経れど少しも思ひもなおされぬ心の中の代はりにもとり集めて、今行く末いみじき人出で来とも、ひとしうだに思ふべくもあらぬものを…

参考 卷四 四四〇頁

八は狭衣の心中思惟、「一は狭衣が相手の女君などの心中を推

し量ることば)

これら五例のうち、①が源氏宮への恋心を告白する前、②は告白した後、③⑤は、何らかの形で女二宮に関わりを持つところで、用いられている。また、心中思惟の中や後に置かれていることにも気づかれる。では①の例から順に場面の説明と狭衣の「心ひとつ」がどう位置づけられているかをみていくことにする。

①の例

この「心ひとつ」は地の文にあつて、源氏宮への恋情を心に秘めていることを誰も知らないという、告白前の狭衣の孤心をいう。流布本も「月も立ちぬれば」の副文節がないが、その他同文が置かれる。狭衣における日常の悩みが、源氏宮への言えぬ恋の悩みとして始発していることを確認しておく。

②の例

狭衣の心中思惟のすぐ後にある「心ひとつ」表現である。源氏宮へ恋情を抱いていることは、他人には「夢にも思ひ寄るなし」という、狭衣の認識が①に引き続いて見える。しかし、「ひとつに見奉りたまふ」「ひとところの御目、耳には知らせきこえたまへど」という源氏宮に対する認識は注意してよいだろう。これは源氏宮と秘密の共有を幻想する狭衣の内心の表れではないかと思われる。「だれにも知られていない源氏宮恋慕」の側面はかわらないのだが、狭衣のたった独りの思いだっただけのものが、恋情吐露によつて源氏宮に押しつけられている。ただし、内心を明かすという行為が思いの共有に傾くのではなく、拒絶され、ますます孤立を深めているのである。まだ狭衣はその孤立に気づいていない。

③の例

狭衣の心中思惟に「心ひとつ」がある。注目すべき点は、女二宮の心の内を推し量り、受け入れられないことを自覚していることである。当然③以前に女二宮への告白があつた。そのうえでなお女二宮と同じ僧形となること、つまり出家することをだれにも言えない秘密として保有することに、みづから「心ひとつ」と限定をくわえるのである。そのうえ、女二宮には「あはれ」と言ってもらえなくとも出家したら仏は「あはれ」と言ってくれるのではないかという心中思惟も狭衣の「心ひとつ」の位相を考えるうえで、注意される。ここには『源氏物語』の薫の孤絶の真相がたゆたつていると思われる。だれにもいえない秘密を持つていたところから橋姫巻の薫は始発したのだが、出生の秘密であつたものがどんだん異化され、興味がないと豪語していた女の問題に抵触してゆくようになる、恋と出生の秘密を「心ひとつ」に意識しながら、弁の君や大君との秘密の共有をはかりとること、さらに中の君にも匂宮との間に秘密を醸成させ、共有するものを確認することを志向している薫がいなかったらどうか。『狭衣物語』は『源氏物語』の薫を引用することで、狭衣の心中はたしかに孤絶を漂わせているが、同時に誰かとの心の共有を画策し、その挫折が孤立させていることを叙述してやまない。

④の例

「かの峰の若松とかや」は女二宮の母大宮が、若君出生の折に読んだ歌「雲井まで生いのぼらん種まきし人も尋ねぬ峰の若松」をさす。しかし、その折は、若宮が女二宮から生まれた事実をねじ曲げて大宮が生んだことに偽装し、そのことを「雲井まで生いのぼらん」と秘密の暴露の無いことを願う心としてあつた。父もわからないような子への、大宮の憐憫が読める歌であつたろう。ここにきて若宮が皇統

を継ぐ者としての言祝ぎに転換されて引き合いにだされているのは、狭衣が歌を解釈し直しているからであるが、語り手もこれに口をはさまず、つまり、狭衣の解釈を援護する形となる。歌が読み手の手を放れたとき、こうして意味が改変されていくことを重ねて語りとする『狭衣物語』⁴は、ここでもまた同様の語りの方法を提示する。こうしたことがおこってしまうのは、語り手と狭衣の関係が密着された状態であることがひとつの理由となろう。狭衣の心の回路を「心ひとつ」と禁域にすることで、歌にあつた大宮の予祝ともいふべき若宮の将来を見通した「祝い」のことが取り出され、この先予言のように物語世界を展開していくのである。

⑤の例

女二宮所生の若宮が物語で「一の宮」と呼称されていることに気づく。藤壺所生の狭衣帝の皇子誕生で、わかかえる堀川大殿邸の様子と世人の「若宮の御おぼえはいかにぞ」であるとか「まことの当代の今上一の宮をばえおし聞こえたまはじ」などという噂が交錯するなか、狭衣の女二宮所生の若宮を特別に思う心が、狭衣の心中思惟で「心ひとつ」と呼ばれる。そして、その特別な思いとは、年月がたつても少しも女二宮への恋情が変わらない自分の心の行く先として若宮を大切に思うという文脈である。この後、若宮を呼び据え、「宮を久う見たまはぬこそ心憂けれな。まろよりほかに限りなう思ひきこゆる人のなきこそあはれなれ」と声を掛けている。その折の若宮は狭衣には「ゆらゆらと女のやうに清らかなる御髪」を持つものと見え、

少し涙ぐみて眉のあたりもうち赤みてうつふしたまへる髪のかかり、額などは、へかの昔ほのかなりし火影にもいとおぼえたまへりしとくく覧する

というように、若宮のなたには女二宮像が結ばれている。これはこの後元服のときも

一の宮の御あげまさりのゆゆしさはなほへいづくにいかなりし人ぞくと胸うちさわぎてあはれあさからぬ御心ざしすぐれたり。

参考 卷四 四四八頁

とあり、その後、髪表現はなくなるが、若宮が女二宮との仲介役であることには変わりはなく、狭衣は若宮に女二宮あての手紙を託し、その若宮を見ては涙をこぼす。この元服後の若宮の風貌が、女二宮には逆に狭衣と「いとど異人さへおほえぬ面影⁵⁾」を宿していることによつて、「はづかしささへわりなうて。」狭衣の手紙への返事を書くこととしない。元服前の若宮は狭衣によつて女二宮を忍ぶよすがとなつていたが、今度は元服による髪の状態が大人の男のものになつた時、若宮の身体が狭衣に通底するコードを身につけた。しかし、そのことに他者は思い至らないのである。狭衣は自身の若宮への愛情をことさら「心ひとつ」と限定を加えたが、もともと若宮⁷⁾は狭衣を中心に父・母・女二宮・嵯峨院などを結ぶ媒介者であつたことが見えてくるのである。

二 女二宮の「心ひとつ」の位相

狭衣に用いられた五例の「心ひとつ」の表現に対して、女二宮には、一例の「心ひとつ」表現がみえる。

おほつかなきことをさへおほしこがれて絶え果てたまひにし海士の刈る藻の心づきなさは、世に知らずつらふおほし知らるるにへ心よりほかならん藻塩の煙をあさまじかりし幻のしるるべな

らでは、夢にだにいかで見じとのおぼさるるを、へいかにしてこのことなからんさきに命絶えずは身をあらぬさまになしてばや。さばかり思ひつつ消え果てたまひにし御身のくるしさを知らず顔にていかでか過ぐさん。身の上よりほかにこの世におほしむすぼほることもなかりしものをとつくづくと過ぐる日数に添へておほし続けれど、さすがに我心ひとつにはすべきやうもなく、人にのたまはんにただ今「げに」と言ふ人あるまじければたけきこととは、御湯をだに見入れさせたまはず。へさばかりおほしたりし身を今までおくらかしたまへるが心憂きあはれとおほしめさば今日明日にもむかへさせたまへとのみおほしめせば

参考 卷二 一六四頁

女二宮のもとへ男が闖入し、その上懐妊してしまうという衝撃的な事件に遭遇した女二宮の母大宮が、女二宮が生んだ子を自分が生んだこととして、嵯峨帝の皇子に偽装した。しかし、それらを巡ることの重大さや女二宮の苦悩を感じて、心痛のあまり心身が衰弱して他界したことに対する女二宮の心中が開示されている場面である。

女二宮の苦悩を象っているのは「海士の刈る藻」という引き歌表現⁸⁾で、「自分のせいで母が亡くなった」という思いである。狭衣が源氏宮思慕のことばとして「忍ぶ振摺」を用いているが、あなた故に恋に惑うと責めることばとの対照をなしていると読めてこよう。さらに闖入者「藻塩の煙」をたとえ夢であろうと二度と逢うまいと心に決め、狭衣との結婚が現実となる前に亡くなるのが出来ないなら出家したい、と、母の死因が自分にあるという自覚に基づき、懊悩を反復する。ここに「心ひとつ」のことばがある。つまり、死ぬことが出来ないな

ら出家というもうひとつの現実的な解決方法を思う女二宮の孤絶の思いが「心ひとつ」の内容である。ただし、女二宮という存在が孤立していることの裏に、管理されていることを明らかにしよう。たとえ女二宮が出家を願い、それを実行しようにも、周りを圍繞する乳母や女房たちにそうした決心を話したところでそれを押し進めてくれたり、同意してくれるはずもなく、女二宮の心も身体も思うままには出来ない状況が語りとられているのである。もつとも管理している者とは、乳母や女房たちというより、女二宮を真に管理している父嵯峨帝からそれを委譲されている者と言った方が相応しいだろう。女二宮は自分に残された自由裁量の領域を出家することではなく死ぬことへと転換させ、「御湯をだに見入れさせたまはず」という絶食を実行していることがこの心中思惟から、はっきりと見えてくる。女二宮がなぜ他者にことばを閉ざし¹⁰、代わって身体表現が多出するのか¹¹、といった問題の所在をここに確認しておきたい。女二宮の孤立の状態と他者と分かち合うことの出来ない孤絶の心は、女二宮という女性の、父が管理しようにも管理できない、逸脱部分と重なり合うのである。こうした女二宮の有り様は、『源氏物語』宇治十帖に見える大君の孤絶¹²と通底する。

三 『源氏物語』の「心ひとつ」表現との径庭

『狭衣物語』の孤絶の問題は、『源氏物語』の引用の上にあることは言をまたない。本章では、その『源氏物語』において、「心ひとつ」ということばと関わって語られる人物とその人物に係する他者との関係について、「孤絶」の観点からの考察をすすめることとする。

1 柏木

狭衣と女二宮はそれぞれの孤絶をかかえているが、両者の関係には『源氏物語』の女三宮と柏木の問題が揺曳している。一章においてみた狭衣の「心ひとつ」表現③の文例にもあるように、女二宮から「あはれ¹³」と言ってもらいたいのだが、女二宮から拒絶され、出家することを希求する狭衣像は、明らかに女三宮に対する柏木の思いを引用しているであろう。その柏木の心中思惟の部分を少し長いが、引いてみたい。

しひてかけ離れなん命かひなく、罪おもかるべきことを思心は心として、また、あながちにこの世に離れがたくをしみとゞめまほしき身かは、いはけなかりしほどより、思ふ心ことにて、何事をも人にいま一際まさらむと、公私の事に触れて、なのみならず思ひ上りしかど、その心かなひがたかりけりと、一つ二つのふしごと身を思おとしてしこなた、なげての世中すさまじう思ひなりて、後の世のおこなひにほい深くすゝみにしを、親たちの御うらみを思ひて、野山にもあくがれむ道のおもき絆^{ほだし}なるべくおぼえしかば、とさまかうざまにまぎらはしつゝ過ぐしつるを、つひになほ世に立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの一方ならず身に添ひにたるは、われよりほかにたれかはつらき心づからもて損ひつるにこそあめれと思ふに、うらむべき人もなし。仏神をかこたん方なきは、これみなざるべきにこそあらめ、たれも千年の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬを、かく人にもすこしうちしのばれぬべきほどにて、なげ^{たげ}の

あはれをまかけ給人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬるしるしにはせめ、せめてながらへば、おのづからあるまじき名をも立ち、われも人もやすからぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、なめしと心おい給らんあたりにも、さりともおほしゆるいてむかし、よろづのこと、いまはのとぢめにはみな消えぬべきわざなり、また異さまのあやまちしなければ、年ごろものををりふし¹⁴ことには、まつはしならひ給にしあはれも出で来なん

新大系 四 柏木 四〇五頁

ここには、親を絆¹⁵と思い、親に先立つ罪を思う心とこの世に留まらず野山にあこがれる心という相反した心がある。しかもなにひとつ不由などないと思われがちな貴公子の、公私に挫折を感じるその繊細な感受性とそれゆえに屈折した心もみえよう。その上で逢瀬を持った女三宮からの傍線部Aの「あはれ」と今まで親交を保ってきた傍線部Bの源氏の「あはれ」を願うのである。こうした柏木の心中思惟の部分と狭衣のそれを比較してみると、女君に「あはれ」を希求する態度¹⁶は同質のものである。ただし、柏木の場合、女三宮に対する自身の行為に關しては、「心づからもてそこなひつるにこそあめれ」と人を恨むわけではない。また源氏に「あはれ」をも期待する心は、柏木が女三宮への恋にのみ命をむなしたのではないことを告げていると読めるが、柏木が自身の心をわかってくれる人を希求するという文脈で言えば、狭衣にも当てはまる心象である。もう一点、狭衣が柏木と通底するのは絆としての親に対する思いであろう。また、柏木に顕著なことは、「もの思ひの一方ならず身に添ひたるは、我より外に誰かはつらき」という自覚である。狭衣の場合、「つらし¹⁵」ということばが狭衣の心内で多出する。それは「我」からあふれ出てしまう「つら

し」なのであるが、柏木は自分の心の中にとどまる思いとしての「つらし」であり、様相を異にしている。

このように柏木は長大な心中思惟を残すが、現段階でそれが誰にも言えない、わかってもらえないという孤絶の思いへと向かう方向ではないことを確認しておきたい。その上で柏木が自分の心を言い当てた「一つ思ひ」という表現はどのような思いを内包している表現であるうか。

「一つ思ひ」は引き歌表現で、本歌は、『古今和歌集』恋一「夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり」の詠み人しらず歌である。自分から火に近寄って身を焦がす夏虫のように一途な自分の思いで「いたづら」になるといふ恋死を形象する歌で、『源氏物語』でもそれを引用して、自分の思いにより死に至るその一途さを言い表しているようか。しかし、見てきたとおり、それは柏木にとつて一つの解にすぎない。また、恋死を象り、そのなかへ自分をはめ込もうとする虚構の恋さえ、柏木は夢想しているように思われる。この「一つ思ひ」が、ともかくにも柏木の心象を形容することばとなった機構に關しては、さらに柏木が亡くなった後、人々の柏木の死をいかに受容するかに見いだせる。柏木の「あはれ」は女三宮には受け入れられなかった。しかし、源氏については世間の人の「あはれ衛門督」という言いぐさと響き合う柏木への「あはれ」が語られている。しかも、女三宮所生の若君薫を形見と見る源氏の世間には知られぬ孤心の中で、月日がたつに従って柏木は「あはれ」と追懐されるのである。

「右將軍が墓に草初めて青し」と、うち口すきびて、それもいと近き世のことなれば、さまさまに近うとほう、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、をしみあたらしがらぬはなき

も、むべむべしき方をばさるものにて、あやしうなさを立てたる人にぞものし給ければ、さしもあるまじき公人、女房などの、年古めきたるどもさへ、恋ひかなしみきこゆ。まして上には、御遊びなどのをりごとにも、まづおぼし出でてなんいのばせ給ける。「あはれ、衛門督」と言ふ言種、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条院には、まして、あはれとおぼし出づる事、月日に添へて多かり。この若君を、御心ひとつには形見と見なし給へど、人の思ひ寄らぬ事なれば、いとかなし。

新大系 四 柏木 四二頁

柏木の「ひとつ思ひ」は、光源氏の死者の形見を迎える者の心に抱き取られて、ようやく死に逝く者の「一途な恋」という理由になったのではないか。したがって、逆に源氏は、柏木を哀悼することで誰にも知られない心を持つゆえの孤立を余儀なくされる。

『狭衣物語』は、狭衣と女二宮の恋に柏木／女三宮の逢瀬を置き、女二宮に受け入れられない狭衣の恋心を執拗に語るが、狭衣の恋は源氏に「あはれ」と思われる「ひとつ思ひ」の柏木像ではなく、あくまで女君に心を理解してもらえず疎んじられる狭衣の孤心を語りつつしていることが、この引用から見えてくるように思われる。

2 六条御息所

六条御息所の生霊となった場面において、六条御息所の思いはどのようなことばで語られていただろうか。まずは、懐妊中の葵上に憑いたもののけが、六条御息所自身の生霊だとか故父大臣の御霊などという世人の噂を聞いて、六条御息所のもの思いが深まり、心中思惟が多

出する部分を引く。

おぼしつゞくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしきれなど思ふ心もなければ、物思ひにあくがるなるたましひは、さもやあらむ、とおぼし知らるゝこともあり。年ごろよろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも碎けぬを、はかなき事をりに、人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしにおぼし浮かれにし心静まりがたうおぼさるゝけにや、すこしうちまどろみ給夢には、かの姫君とおぼしき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、うつゝにも似ず、猛くいかきひたぶる心出でて来て、うちかなぐるなど見え給事たび重なりにけり。あな心うや、げに身を捨ててや往にけむ、とうつし心ならずおぼえ給をりもあれば、あさならぬ事だに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよう言ひなしつべきたよりなりとおぼすに、いと名立たしう、ひたすら世に亡くなりて後にうらみ残すは世の常のこと也、それだに人の上にては、罪深うゆゝしきを、うつゝの我身ながら、さるうとましきことを言ひつけらるゝ、宿世のうきこと、すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ、とおぼし返せど、思ふも物をなり。

新大系 一 葵 三〇三〜三〇五頁

葵上にとり憑いているのは、六条御息所の生霊だとか亡くなった父大臣のものけが出来しただのの噂に、今までは「身ひとつのうき嘆き」であつたと思つていたが、そうした自分の認識を超えていくこともまたあり得る激しい情念の所在に、六条御息所は思い当たつたのである。そして、自分の意識を超えて乱暴狼藉を働く自分を夢に見て

「身を棄てて」しまいたいとの思いもほのめきたつが、世間の噂のまびすしいことや自身の宿世のつたないことを思い、死ぬことを断念する。そして、到達したのは、源氏への恋情をあきらめようと思念したのであると、まずはおさえておこう。こうして、世間の噂を他者として、六条御息所固有の思いは凝縮されていく。しかし、ここで注意したいのは、御息所がわれにもあらず思いが錯綜してしまうというより、どうしたことだろうかと自分に問い質し、自分を理解する手だてを模索していることではないだろうか。こうしたことの根本には、自身の源氏への執心があることを認める理性があるろう。もともとこの理は、自分の回路に敷かれたレールを通ったものでしかなく、一般性には拘わらない。心の深みを見つめることが出来ることと一般の理性は別物である。「世間の目」という外在化されたまなざしを身に添わせて生きてきた御息所は、たえず抑制していたのであろうことも見えてくる。この抑制がもはやきかないまでの思いになっていたことを「思い知る」六条御息所が確認できるのである。

さらに自身の魂が憧れ出て生霊となつたのだとの確たる認識を持つたのは、葵上が男児を出産した時であろう。出産の噂に「たいらかにもはた¹⁷⁾」と妬ましい心が惹起する。先ほどからの心のメカニズムが始動し、「あやしう、われにもあらぬ¹⁸⁾」心となつている自分を検証する時、現実生きる自分の身体に映し出された「生霊」の徴を見つけるのである。

御衣などもたゞ芥子の香にしみかへりたるあやしさに、御泪まゐり、御衣着かへなどし給て心みたまへど、猶同じやうにのみあれば、わが身ながらだにうとまじう思さるゝに、ましてへ人の言ひ思はむことゝなど、人にの給べき事ならねば、心ひとつにお

ぼし嘆くに、いとゞ御心変はりもまさりゆく。

新大系 一 葵 三〇八頁

と、着物や髪に付着した「芥子の香」は、六条御息所にとって加持祈祷やもののけ退散の修法の現場性を明かすものだった。このことも他人にはあれこれ噂の種になつてしまふ恐れから聞けない¹⁹⁾。しかし、本当に「香り」は漂つていたのだろうか。誰にも認知されない幻想としての「芥子の香」だったという可能性もあるろう。つまり、物語は六条御息所の認識において真実香つていた「芥子焼き」の香を語り、芥子の香がたつ身体を持つ六条御息所に、誰とも心を共有できない孤立を語るのである。こうして六条御息所の孤心を語るのに身体が持ち出され、誰にも明かせない孤絶を取り押さえることばとして「心ひとつ」が置かれる。

この六条御息所の「心ひとつ」は、『狭衣物語』に引用されて女二宮のことばの有り様と身体表現に表出していると思われる。ただし、第二章の女二宮の「心ひとつ」文例を見てもわかるように表層表現上ではない。『狭衣物語』を『源氏物語』読者の享受と重ね、『源氏物語』への批評を孕むものとしてあるとの読者論に立つて、ここは、心中思惟を突き抜けたところにある身体を『源氏物語』の当該部分に見出し、さらに浮舟造型を通過させて、共有できない心を持つ女君のことばの有り様と沈黙の裏にあつて逆に饒舌でもある身体を女二宮造型で表しているのではないかという、読みを提示してみよう。女二宮の場合は、管理された存在としてある自身の身体と心に向き合うことが、図らずも男君狭衣の侵入によつてであり、強引に世の中と対置された女の、管理されているがゆえの引き裂かれた思いがある点、また、狭衣との関係を絶つという決心が固いところも六条御息所の孤心とは、位相を

異にしていると思われる。

3 薫と大君

薫と大君の「心ひとつ」については、既に前稿「宇治への道」論で述べた。本稿では『狭衣物語』の狭衣と女二宮にみえる「心ひとつ」と、『源氏物語』宇治十帖で展開されているそれとはどのような相違があるかという点にのみ絞って考察を行う。

薫の構成主義的に今を生きる有り様は、出生を巡る不安から始発して、誰にも言えないはずの秘密を持つ自分と語り合う人間を求めるところとへ向いていたといえようか。事の起源もしくは秘密が秘密とならざるを得ない本源を問うという形ではないのである。そこで秘密は秘密のままあるというより、次の秘密を作る媒体にもなり、秘密を巡って人間関係をも構築してゆくということがみられるようになる。老女房弁の君と幾度も「昔語り」をする薫は、秘密をさも共有しているかのように弁の君と語り合う。大君への接近もその弁の君を通してであり、秘密を持つ自分と語り合うことを大君に求めた。大君亡き後は、匂宮の妻となっていた中君に近づき、匂宮にとつての秘密ともなるべき接近を繰り返して、共有体験を語ることを求めていた。こうした薫の秘密に対して構成主義的な側面を見ておきたい。こうして秘密が作り出され、もとよりの秘密を異化させたり、空洞化させたりして起源が見えなくされていくことが、宇治十帖の都と宇治を巡る物語にはあったといえよう。したがって、薫の孤絶は形にこだわることとなり、人を求めることが逆に孤立を深めていくことに通じる。『狭衣物語』の男君狭衣には、こうした薫の孤絶がずらされつつ引用されたと読めないだ

ろうか。

一方、大君の孤絶は薫と異なり、人を介さない幻想によって形づくられている。そして、それを統御するのは、意志の力といってよいだろうか。父八宮の遺言の解釈にそれはよく表われている。中君との解釈が違うこともその証しになる。大君の孤絶は誰も守ってくれる人がいない所に身を置いたという自覚とタナトスへの希求に顕著である。これは『狭衣物語』の女二宮にも見えることであるが、女二宮の場合、父によって外在的に管理されていることから、心も身体も自由ではない。しかも、その管理から逸れてしまう身体と自分との葛藤も孤絶への道を歩ませているので、大君との相違はそこにある。

また、もうひとつの相違は、八宮と薫が紡ぎ出した文化的養子縁組関係をコアにして、薫が抱く勝手な幻想を押しつけられそれに左右されながらも、それゆえにこそ性の越境を視座に含みつつ逆に父との文化的養子縁組を取り結ぼうと幻想の中に死んだ大君のセクシュアリティは、女二宮には見られない。女二宮の場合は、突然の侵入者として狭衣と出会い、その結果一夜孕みの子を宿すので、大君と薫の関係とはそもそも異なっている。男としての狭衣を拒否し続け、実子若宮の母役割を遂行しない女二宮のセクシュアリティとジェンダーは「この世」の拒否という観点から明確な類型化として把握出来る。天の羽衣を着たかぐや姫の「あはれ」が通わない造型が、『源氏物語』の浮舟を通過し²⁰、それとの相違を見せつつ引用されていると思われる。にもかかわらず大君と薫を巡る男／女の孤絶の問題は子供を産んだ女二宮の、母の子にして子の母役割は遂行しない（出来ない）孤絶と向き合っていると言わざるを得ない。薫と大君の孤絶を経て、女二宮の孤絶は男女の孤絶の相違という当面の問題を明確化しているであろう。

4 女二宮の母大宮

女二宮の母大宮も、「心ひとつ」ということばで表される誰にも言えない心を持った人物である。当該箇所は、女二宮のもとへ狭衣が侵入したことに気づく場面にある。

へさればこそ人の入り来たりけるにこそありけれ。心憂や。誰ばかりにこそありけん。かばかりの御身の程に、かかる例、世にありなんや、いでや、左大将のこの世にあまりて、なべてならぬ有り様なるを、上の「行く末の後身にも」とのたまはするをだに宮たちはただ何となくて過ぐしたまふこそ世の常のことなれ。行く末のためとなほなほしく定まりたまふとも、さばかり思ひよらぬ隔なかななる心の程には、至らぬ隔なき心ばへをや見たまふらんゝとめざましう心憂ければへ見たてまつらんゝとこそ思ひきこゆるにへこはいかなりけることならん。さりとも知りたつ人もあらんかしゝと、あさましういみじけれど、人々に問ひ、案内したまふべきことにもあれねば、ただ御心ひとつにくだくるさま、かたときの程だにいみじかりけり。
 (へゝは大宮の心中思惟、「」は嵯峨帝の発言を引く大宮の間接話法、なお大系本には御心ひとへ」とある)

参考 卷二 一三三頁

女二宮を案じる母大宮は帝に連夜召されて娘たちに心苦しう思っていることがこの前文におかれてあった。そして、たぶん帝から女二宮に処遇についての決定である狭衣への降嫁の話聞き、好色な男君であろう狭衣に、女二宮が苦勞することを推し量り、女二宮へまず会いた

いと戻ってきたことが心中思惟の部分から判明する。しかし、そこにあったのは男が侵入した形跡と女二宮の涙の跡であり、この事態を執り図ったかもしれない女房の存在も考えられて思案にくれる大宮の孤立が「心ひとつ」と表現されていたのである。ここに見える「心ひとつ」は、母としての大宮の表象となる。だれにも言えない心を持つことで、大宮の苦悩は特化され、何も知らされない、また知ろうとしない父嵯峨帝との相違を示すのである。

四 『伊勢物語』の「心ひとつ」表現と歌語としての「心ひとつ」

『伊勢物語』には、男の歌に「心ひとつ」表現が二カ所見える。

①むかし、はかなくて絶えにけるなか、猶や忘れざりけん、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつ猶ぞ恋しきといへりければ、「さればよ」といひて、をこゝ、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜にならずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらん

返し

秋の夜の千夜を一夜になせりともことは残りてとりや鳴きなん

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

大系 二二段 一二五頁

②むかし、をとこ、つれなかりける人のもとに、

いへばえにいへば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころ哉

大系 三九段 一三二頁

①の例は、ふとしたことが原因で仲が「絶え」てしまった女から「恨みつづ猶ぞ恋しき」と贈歌がきた。男が「それみたことか」と言っているのが、女から別れ話を出したのだろうか、「心ひとつ」の歌語を含んだ歌を返す。「とはいひけれど」とあるので、「さればよ」が利いている歌として解釈できるであろう。女の心は語られることがないが、歌からは、いやなことがあったのにあなたを忘れられず、恨みかつ恋しいという相反した感情のあることを素直に詠んだことがうかがえる。その女のことばを言い換えたのが「あひ見ては」の歌ではないだろうか。男は女の感情を分析し、あなたがそういう気持ちになったのは男を「あひ見²¹」たからで、そうした深い「心」を交わした以上、仲絶えの川島があつたとしてもまた流れが「ひとつ」になるのである。あなたと同じように、自分もふたごころなくあなた独りをずっと思つていようと言ふ。

女にとつて、その男を忘れられない思いは、男をのみ思う「心ひとつ」であるが男の場合は、女の誤解があつたかもしれないが「ふたごころ」に対する「心ひとつ」ではなかったか。ふらふらする自分の心をしかと決定しがたいという歌作例は、『古今集』恋一の「伊勢の海に釣りする海士のうけなれや心ひとつを定めかねつる」に見える。「心ひとつ」の歌を詠む男が歌を詠んだだけでなく「恋しい」という女の許へ早速夜出かけていったという文脈である。そこに「とはいひけれど、その

夜いにけり」と逆態接続を伴うのは、女の男の愛情に対しての疑いや嫉妬といったものの存在を証しているのではないか。男の歌にある一般的な物言いが男の弁解をも含み込んだそれとしてあることを男が自覚するならば、歌だけ贈つてもしかたのないことで「逢う」ことが求められているからである。そして、「逢」つた後、後期物語でよく引用される「千夜を一夜に」の和歌贈答となる。「心ひとつ」歌がこれだけで独立していたら、男の誠意が「心ひとつ」²²に表れているという解釈が成り立つが、『伊勢物語』においては、男の優位性が女に「恋心」を教え諭す歌にもなっていると思われる。後の「千夜を一夜に」贈答で女の答歌にある「ことば残りてとりや鳴きなん」ということばに表象される心のストレートさいいかえれば純情のもつ幼さがこの女の本性であろう。女のいう「ことば」とは、男の誠意がこもった「ことば」をさし、「心ひとつ」もそれに伴つて浮上してくる男の「ことば」のひとつであつただろう。お互いに誠意ある約束の「ことば」が尽きないうちに朝を迎えてしまうという女の観念は、切ない思いを伝えて、男の心もつないでゆく。しかし、今一度踏みとどまつて「心ひとつ」歌に立ち戻つた時、逆にことばの無効性がすけているかのような印象も与えてはいないだろうか。女には「ことば」でなく「逢う」ことが重要だつた。男にはそう分かつていて「心ひとつ」と言つたなら、男のいう「心ひとつ」は、約束ではなく単なる弁解にすぎない。高みにたつた男の姿が見えてくるのである。

②の例は、女に思いを「言う」か「言わない」か、いずれにしても嘆きが去らない孤絶をいう男の「心ひとつ」表現である。言おうとしても出来ず、言わないままでは苦しいと女に「言う」のであるから、こういう形で告白をしているのは、『狭衣物語』の狭衣が女二宮へ訴

えるところに通じていようか。底流には先ほど指摘した『古今集』の「伊勢の海に釣りする海士のうけなれや」歌に見える男のたゆたいが揺曳していると思われる。

それに対して、『伊勢物語』の「心ひとつ」章段にあった女の恨みと重なる「心ひとつ」表現は、『拾遺集』恋五に見える。よみ人しらず「つられど人には言はず石見湯怨みぞ深き心ひとつに」歌である。言わないで自分の胸に収めている怨みは深く、言わないがゆえの孤がここにはある。『伊勢物語』などに見える男の孤絶とは異なるものであることがわらう。

結 明かすことによって生じる孤絶の問題

『狭衣物語』における「心ひとつ」の表現は、その心を有する人物の孤絶と関わりを持つことばであった。『源氏物語』の六条御息所の「心ひとつ」の表現が拓いた意味の地平をさらに宇治十帖がさまざまな色で染め変える。それは、女君が男性と交通不能な自分の心を見つめることに向かう。こうした女性の孤絶と男性のそれとの相違も指摘しておきたい。『平中物語』初段にあった男の「心ひとつ」表現は、失恋と沈淪に彩られている。これを系譜として辿っているのが、『源氏物語』の薫と『狭衣物語』の狭衣で、『源氏物語』のなかで光源氏に用いられているものは、柏木の「一途」さに返照された源氏の孤独であった。『狭衣物語』にみえる狭衣の「心ひとつ」に象徴された孤絶は、自分の心を女君に明かすという告白の場を伴う。そして、告白は、告白をして思いを共有する方向にはならず、かえって埋めようのない溝のあることを確認する行為となり、狭衣は孤絶を深めていく。そして、そ

れは女二宮の孤絶に見合う絶望的な孤立といえよう。狭衣の孤絶は、そもそも超俗的属性を持つことに始発していたのだが、こうして日常的な恋の世界に還元され、巻四巻末で女二宮のもとを出る際、女郎花を眺める狭衣の形象にそれを確認することとなる。こうした狭衣の中にある恋に苦しむ姿は、待つ女の苦しみにも通底し、その苦しみと孤絶がともに置かれるのである。女の苦しみをも担う男君としての狭衣は、薫との差異を明らかにしていく。

同様に『狭衣物語』において「心ひとつ」が用いられている女二宮の場合は、降り掛かった災難を誰にもうち明けられない人物としての心において、用いられている。女二宮と繋がるにはことばではなく「気づく」ことが必要で、そうやって繋がっている母大宮との一体化は、母への依存と自己嫌悪の巣窟として語られていく。娘の身代わりになって世間や帝を欺くというように心に負荷をかけ、その心痛故に母が亡くなってしまうと、父に管理されている女二宮の心身は、逆に自律を画策し始める。心を統御しようとしても出来ないところ、もしくは無意識のレベルで女二宮は、身体にその心を写していくのである。これは、『源氏物語』の六条御息所にみえた「心ひとつ」の変奏ともいうべきもので、女性がだれにも語れない独立した領域を心を持つさまを引いている。こうした女性の孤の意識は、平安時代女性日記文学や『枕草子』にも散見されるものとの共通認識として抑えられようか。たとえば「心ひとつ」を表現として持つ『枕草子』跋文をあげておこう。

おほかたこれは世にかしきことを人のめでついなど思ふべきことなほ選りいでて、歌なども木、草、鳥、虫をも言ひだしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見つなり」とそしられぬ、心

一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものたちまじり人なみなみなるべき耳を聞くべきものかはと思ひしに

根来司『新校本枕草子』（笠間書院 一九九一年）より三巻本を抽出 三六四頁

清少納言の自負と韜晦の入り交じった、他者とは異なる自分だけの感覚や思いが、ここに書き付けられている「心一つ」にみえようか。他者のまなざしによって独りよがりと独創とに振幅するその孤の心は、他者との心の通交が簡単にはできないという諦観と苦渋の蓄積によって獲得されたものであろう。

女性の「心ひとつ」を考察するにあたっては、『狭衣物語』に「語らない」「告げない」女君として登場する飛鳥井女君にも一言触れておくと、この女君には「心ひとつ」の表現がない。しかし、その理由もまた明解に引き出すことができる。飛鳥井女君の場合は狭衣を慕う恋であって、女二宮とは狭衣との関係が異なる上²³、日記を「書く」ことで女君の死後狭衣へそのことばが伝えられるという相違がある。心の通交を望みつつ現実にはそれが果たせなかった場合は、「心ひとつ」のことばは付されないとみていいか。ともあれ位相が異なるものの心とことばの行き違いがこの女君たちに共通して見られ、後期物語における女性たちの孤絶を印象づけている。

『狭衣物語』は、男主人公狭衣の「もの思ひ」という姿態を印象的に語りとり、女に見紛う受苦の身体を置いた。しかし、読みのレベルでの男/女性の越境とは裏腹に、心内はその孤絶の相違を表意しているのである。『狭衣物語』に見える男女の孤絶は、中世王朝物語の世界で²⁴、「孤絶の共有」という狭衣型が類型化されつつ変貌を遂げている様相を確認することとなる。

注

(1) 井上「わたしを語る物語―『狭衣物語』における語りの方法」(『日記文学の地平』新典社 二〇〇一年) 参照。

(2) 女を対象とした孤絶の問題が『源氏物語』で提起され、『狭衣物語』ではこれを命題として受け止めて、より先鋭化したと思われる。そのことに関し、以下の論考で方向を示す。①「宇治への道―『源氏物語』橋姫巻の語りの方―」②「宇治への道―権本巻・総角巻の「迷妄」を探る―」(ともに『東京家政学院大学紀要』四一号・四二号、二〇〇一年・二〇〇二年) 及び③「物語の欲望・読者の欲望」(『物語研究』二号 二〇〇二年三月)。

(3) たとえば、匂宮不在の折を見計らってやってきた薫は中の君と対面し、女二宮降嫁に際し、以下の会話を交わす。

(薫)「心にもあらぬまじらひ、いと思ひのほかなるものにこそと、世を思給たまへ乱るゝ事なんまさりにたる」と、あいだぢなくぞ愁へ給。

(中の君)「いとあさましき御ことかな。人もこそおのづからほのかにも漏り聞き侍れ」などは給へど、へかばかりめでたげなる事どもにも慰まず、忘れがたく思ひ給覧心ふかさよとあはれに思きこえ給に、おろかにもあらず思ひ知られ給。

また、若宮を見たいという薫に対して、

何かは、隔て顔にもあらむ、わりなき事ひとつにつけて、うらみらるゝよりほかに、いかでこの人の御心にたがはじ。

新大系 五 宿木 一〇三頁
新大系 五 宿木 一〇四頁
という中の君の心中思惟が見える。匂宮の妻としてある自分と薫の間のみ

通じる回路が敷かれていることが読者の側から確認できよう。

- (4) 詠まれた歌が、詠み手の思惑を離れて意味が改変されたり、ずれて伝わったりすること、また、なかなか相手に届かなかつたりすることが、物語を進行させている。たとえば、巻一の「紫のみのしろ衣それならば乙女の袖にまさりこそせめ」歌や飛鳥井女君の日記の歌・狭衣の扇に書き付けられた歌など。

(5) 巻四 450頁

(6) 注(5)に同。

- (7) 若宮に関して最近の論に、倉田実「狭衣と若宮をめぐる―「預かり」と若宮即位への道筋―」(『大妻国文』三三号 二〇〇二年三月)、同氏「狭衣物語」の若宮をめぐる―『源氏物語』引用からの創造―(『論叢狭衣物語』3―引用と想像力―新典社 二〇〇二年五月)、平井仁子「狭衣物語試論―子の意味を問う―」(『講座平安文学論究』一六輯 二〇〇二年)がある。本稿ではメディア(媒体)としての若宮に着目した。

- (8) 『古今和歌集』恋五藤原直子「海士の刈る藻にすむ虫のわれからとねをこそなめ世をばうらみじ」及び『伊勢物語』六五段の引き歌表現。女が宿世と現実の間で我が身の境涯を思うとき、よく引き歌にされる。男が「忍ぶ振摺」を引き歌とすることの違いを確認しておきたい。『夜の寝覚』においても中の君の心をこの歌を引いて表出している例がある。野口元大『『寝覚』の女君―第一部における運命と性格―』(『今井源衛教授退官記念文学論叢』一九八二年、後『王朝仮名文学論攷』風間書房 二〇〇二年所収)論では、中の君が「内面の孤独」を確保する契機をこの引き歌表現に読まれる。

- (9) 父の娘管理については、二〇〇二年一月一日に奈良県女性センターで「嵯峨帝(院)のまなざしと耳」題で口頭発表を行った。改稿して『狭衣物語』嵯峨帝(院)のまなざしと耳―父の娘管理に触れて―題で『物語研究』三

号(二〇〇三年三月)に発表。

- (10) 鈴木泰恵「狭衣物語の表現機構―女二宮をめぐる―」(『国文学研究』一九九一年 三月)

- (11) 土井達子『狭衣物語』女二宮の身体をめぐる―表出の方法あるいは媒体としての身体―(『岡大国文論稿』二九号 二〇〇一年三月)ただし、本稿では心のことばまでは閉ざしていない女二宮像を確認した。『源氏物語』が女性の心の屹立としての「心ひとつ」へと向かい、浮舟の母中将君の独善へたどり着くのに対して、『狭衣物語』の女二宮にみえる「心ひとつ」は、身体的言語を付随させることによって、女性一般が抱えている孤絶という普遍化されたものへ向かっていると思われる。

(12) 注(2)にある②の拙稿参照。

- (13) 萩野敦子『狭衣物語』女二宮物語論―「あはれ」「つらし」を軸として―(『国語国文研究』一〇二号 一九九六年三月)

- (14) 言うまでもないが、柏木に関して当該部分のみならず、若菜下巻及び柏木巻にも「あはれ」を求める柏木像が見いだされる。また、柏木の遺言を受けて柏木を追悼しつつことの真相に迫る夕霧の心中思惟に「心ひとつ」表現(新大系四 三二頁)が見え、柏木Ⅱ女三宮Ⅱ源氏の秘匿された関係が夕霧の心内に確保されることに注意したい。

- (15) 特に女二宮との恋に「つらし」が見えることについて、注(13)の萩野論文に詳しい。私見については「狭衣の恋―『狭衣物語』の「世」をめぐる―」(『立教大学日本文学』四四号 一九八〇年七月)参照。

- (16) 本歌として『拾遺和歌集』恋五紀貫之「おほかたのわが身ひとつのうきからなべての世をもうらみつるかな」をあげておく。『蜻蛉日記』には「身ひとつのかくなる滝を尋ねればさらにかへらぬ水もすみけり」がある。同じ『源氏物語』には、野分巻に明石君の歌として「おほかたに狭の葉わたる風の音

も憂き身ひとつにしむ心ちして」、また、夕霧巻に落葉宮の歌「何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしとも聞く」、宿木巻に中の君の「秋はつる野辺のけしきもしのすきほのめく風につけてこそ知れわが身ひとつの」も見える。六条御息所の場合、決して相手のせいではなく自分の方に原因を探ろうとしている態度である。これは『狭衣物語』にあつては、女二宮の心中思惟「憂き身ひとつのゆゑにかくならせたまひぬる」(巻二 一五二頁)、「憂き身ひとつゆゑにやつれにしぞ」(巻三 二二七頁)と母大宮を氣遣う場面に「身ひとつ」表現が見え、六条御息所と相通する女二宮の心情が語られている。「心ひとつ」とともにこれも『源氏物語』引用として読みたい。

(17) 葵巻 三〇八頁

(18) 注(17)に同。

(19) 八人の言ひ思はんこと^vを六条御息所の心中思惟として捉えた。他者に圍繞され、噂に呪縛されていることが読みとれるのではないだろうか。

(20) ここでは、「天の羽衣」と「尼衣」の相通／変換から、浮舟造型にかぐや姫引用を読んだ小林正明「最後の浮舟―手習巻のテクスト相互連関性―」(『物語研究』新時代社 一九八六年)論を想起している。

(21) 「あひ見で」説をとらない。

(22) 『続後撰和歌集』では業平歌となつている。

(23) 飛鳥井女君は日記を記し、「書く」こと、形見の品を娘に譲渡することで、結果的には、自身の欲望をも譲渡する。その内実は、娘の飛鳥井姫君が狭衣に見つけられ、一品宮の称号を受ける存在となることで、飛鳥井女君鎮魂の物語は大団円へと収束される。狭衣の身辺への回帰が王権に回収されるといふ構図は、飛鳥井女君の望んでいたことは表層表現上、語られていないが、飛鳥井女君の存在が形見を通して狭衣の記憶に刻まれて語られ、娘を通して女君の存在が惹起されることにおいて、及び帝となつた狭衣の論理において、

飛鳥井女君は狭衣王権に回収されると読める。こうして狭衣は、飛鳥井女君との過去の想い出を共有する契機を得ているのだが、女二宮の場合、もつと入り組んでいる。女二宮は身体の気配を消去したいと思つているにも関わらず、逆に狭衣によつて過去の手当たりや匂いが想起される身体を持つている存在である。しかも、父である嵯峨帝(院)によつて狭衣王権は嵯峨一統の系譜を引くことを要請される。女二宮は狭衣王権の内と外という境界にいるが、精神的に狭衣王権に与さない人物として語られているのではないだろうか。つまり、狭衣を領有しようとする嵯峨院、女君を領有しようとする狭衣が向き合うなか、女二宮の孤絶が際だつのである。

(24) 作中人物の心境の共有化について、宮谷聡美氏の「和歌」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版 二〇〇二年)の項目に「秋霧」での例証がある。

また、冒頭部で「ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなくわすれがたくおぼゆることどもの、あるをりをりふと心におぼえしをおもひいでらるゝまゝに、我めひとつにみんとてかきおくなり」と書き記す『建礼門院右京大夫集』の「我めひとつ」の表現に注意したい。右京大夫は資盛の死後回想して

「のちの世をばかならず思ひやれ」といひし物を、へさこそそのきはも心あはたゞしかりけめ。又おのづからのこりて、あととふ人もさすがあるらめど、よろづのあたりの人の世にしのかかるへて、なに事もみちひろからじ^vなど、身ひとつのことに思ひなされて、かなしければ、おもひをおこして、ほうぐ^反ゑり出だして、れうし^軒にすかせて、経書き、又さながらうたせて、^文まじのみゆるがまはゆければ、うらに物をかくして、手づから地蔵六体すみがきに参らせなど、さまさま心ざしばかりとぶらふも、人めつゝましければ、うとき人にはしらせず、心ひとつにいとなむかなしさも、なほたへがたし

古典大系『平安和歌集』 四七五頁

やよひの廿日あまりの比（よ）、はかなかりし人の、水のあはとなりける日なれば、
れいの心ひとつに、とかくおもひいとなむにも、我なからんのち、たれか
これほどおもひやらん。

古典大系『平安和歌集』 四九〇～四九一頁

（罫注は私に付し、漢字・送りがなを一部改めた。△▽は心中思惟）
と「心ひとつ」という表現で孤心を語りとる。このあたり、『源氏物語』幻巻
の引用が指摘されるが、『狭衣物語』飛鳥井女君が残した反故の処理をめぐる
表現も踏まえられているだろう。また、「心ひとつ」表現に付随するこうした
傾向は、女性執筆者だけでなく、誰とも通交できない悲しい心を持つ者に引
き継がれていく文芸現象である。たとえば男性である源通親の、主上に後れ
た哀しみを書き記した『高倉院升遐記』にも見える。
こうした『狭衣物語』に関する引用や潮流を「狭衣批評」という術語でま
とめておきたい。また、「歌をうたう女」という視点から女性の孤絶の当然問
題とすべき必然を感じる。女歌の系譜とは別に女の述懐歌という項目が設定
されないだろうか。この点に関しては別稿を用意する。

付記 本文として内閣文庫本狭衣物語を使用し、岩波書店古典大系本『狭衣物語』

の頁数を参考として掲げた。

人文学部日本文化学科